



|                  |  |
|------------------|--|
| Title            | まえがき   |
| Author(s)        | 津曲, 敏郎   |
| Citation         | ツングース言語文化論集, 50, 1-2<br>アレクサンドル・カンチュガ著; 津曲敏郎編訳, ウデヘ語自伝テキスト : 2 青年時代 =<br>: 2 . 北海道大学大学院文学研究科, 2010, 171p,<br>(ツングース言語文化論集 = , 50). |
| Issue Date       | 2010-03-31   |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/56396">http://hdl.handle.net/2115/56396</a>  |
| Type             | report   |
| File Information | 02tsumagari.pdf  |



[Instructions for use](#)

## まえがき

本書はアレクサンドル・カンチュガ氏 (Aleksandr Aleksandrovich Kanchuga, 1934-) によるウデへ語自伝第2巻「青年時代」(Kanchuga/ Tsumagari ed. 2005) の日本語対訳版である。氏からウデへ語・ロシア語対訳による自伝原稿を提供されるに至った経緯については、第1巻の日本語訳であるカンチュガ／津曲訳(2001)、および同巻の日本語対訳版であるカンチュガ／津曲編訳(2002)を参照されたい。氏の自伝原稿は今日まですでに7巻に及んでおり、そのうち5巻目までがウデへ語(ロシア字表記)・ロシア語版の形で刊行されている(Kanchuga/ Tsumagari ed. 2003, 2005, 2006a, 2006b, 2007)。今回扱う第2巻では、1950年から53年に至る期間、著者が十年制学校の最後の3年間を過ごし大学生になるまでの、言わば「高校時代」が描かれている。

これまでの刊行において、ウデへ語の表記は基本的に原著者によるロシア字表記のままであったが、今回の対訳にあたってはローマ字音韻表記に改めた。いまだ暫定的ではあるが、次のような音韻体系を仮定している(ウデへ語音韻論上の主な問題点について津曲2010も参照)。

### 音素目録

子音 : p, t, k, b, d, g, c, z, m, n, ŋ, f, s, x, l, w, j

母音 : i, e, a, o, u

音節構造 : C(G)V(V)(C) Gは半母音 w, j

このほか外来語およびロシア語の表記では r, v, ch, zh, sh, shch, ' , y(それぞれロシア字 p, в, ч, ж, ш, щ, ь, ы に対応)も使用した。なお、ロシア語の語句をそのまま引用しているような場合に限り、斜体で示した。

母音 e は基本的に [ɐ] であるが、ロシア語借用語などでは [e~ɛ] もある。

子音 c は i, j の前で [tʃ]、それ以外では [ts]、s も i, j の前では [ʃ] である。ti/ci と di/zi それぞれの区別は、原著者の表記では ти/чи および ди/зи として現れる。その区別は語(形態素)によって一定しているものもあるが、揺れを示す場合も少なくない。おそらく著者の発音では中和に近い状態と見られる。本書ではこの区別について、先行記述の表記にしたがった部分がある(Girfanova 2001, 風間 2004 など)。このほか母音の長さなども、原著の表記では必ずしも一貫していない場合が多い。

本書のウデへ語表記は、原著者のロシア字表記をもとにしつつも、著者が朗読した録音を参照したうえで、必要な音韻解釈を加えたものである。特に母音の長さについては、形態的に長母音が期待されるところでも、短く実現することがあるが、基本的に録音での発音によって区別した。一方で、同じ形式に対しては、なるべく表記が一貫するよう配慮したが、不統一な個所も残っているとと思われる。こうした発音の縮約をどう解釈し、表記すべきかは今後の課題としたい。なお

朗読の音声を CD の形で付すが、読み誤りなどによって原テキストと多少食い違う部分もある。

日本語対訳は原著のロシア語訳を参照しながら、できるだけウデへ語に即した訳をこころがけた。意味不明の個所については著者から直接説明を受けた部分もある。なお、テキストに挿入されたカッコ内の数字は原ノートのページ番号である。

今回の対訳版刊行に先立ち、ロシア語の和訳には加藤菊緒さんの助力を得た。著者の手書き原稿からの入力・整理にも何名かの方のお世話になったが、とりわけ小林香与さんには編集面に渡って多大の助力を得た。また風間伸次郎氏からは、現地調査の際にいろいろご教示を得た。これらの方々にお礼申し上げたい。何よりも著者アレクサンドル・カンチュガ氏には、変わらぬ感謝と尊敬の念を捧げたい。

Асаса, бообоймэ Канчуга бэени. Гоо, аязи багдие!

Asasa, booboime Kanchuga bejeni. Goo, ajazi bagdije!

ありがとう、親愛なるカンチュガさん。いつまでも元気で過ごしてください！

## 参考文献

Girfanova, A. X. 2001 *Slovar' udegejsogo jazyka*. Sankt-Peterburg: Nauka.

風間伸次郎 2004 『ウデへ語テキスト(A)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

カンチュガ, A./津曲敏郎(訳) 2001 『ビキン川のほとりで: 沿海州ウデへ人の少年時代』札幌: 北海道大学図書刊行会。

\_\_\_\_\_/\_\_\_\_\_(編訳) 2002 『ウデへ語自伝テキスト』(ELPR A2-019, ツングース言語文化論集 17, CD1 枚付き) 吹田: 大阪学院大学情報学部。

Kanchuga, A. A./T. Tsumagari (ed.) 2003, 2005, 2006a, 2006b, 2007 *Bagdise xokto telunguni 1-5* [Avtobiograficheskaja povest': 1 Detstvo, 2 Junost', 3 Studencheskie gody, 4 Faja, 5 Oxotnich'i rasskazy] (ツングース言語文化論集 22, 28, 29, 33, 34) 札幌: 北海道大学大学院文学研究科。

津曲敏郎 2010 「ウデへ語音韻論覚え書き: 地域類型的観点から」北大言語情報学講座(編)『言語研究の諸相』北海道大学大学院文学研究科。